＜書かれたもの ―Schrift―の意味＞（続）
――R.ムジールの言語観をめぐる考察――

Die Bedeutung des Geschriebenen (<Schrift>)
――eine Vorarbeit zum Thema Sprachdenken bei Robert Musil (Fortsetzung)――

米沢　充
Mitsuru Yonezawa

「Schrift は私にとっては、何か密かな魔力をもっています。(…) われらがハーマンの幾分神秘的な言葉に倣って言いたいのですが、＜生きるとは書くこと＞なのです。」(Fr.Schlegel an Dorothea)

「(言語的な) Formeln はそれ自体で一つの世界をなしている。それは自分自身とのみ戯れ、自らのwunderbar な本性のみを表現する、(…) だからこそその中では事物のseltsam な関係の戯れが映し出されているのだ。」(Novalis: >Monolog<, Schriften 2, S.672) [1]

(一) R. ムジールの「言語の小説」

本稿では、W. ベンヤミンの思想根底にある言語論、Schrift 論さらにはアレゴリー論を取り扱った前回の拙論[2]に続き「書かれたもの」Schrift について考察をつけ加えるが、それは、その時点以来から多様に目につくようになったこのテーマに関連する理論面を整理しておきたいという願望と、また、その理論的なものがムジール文学の核心的な問題への視点を強化してくれるはずだという確信に由来するからである。

とはいえ、現代ドイツ解釈学派の総帥　H.-G.ガーダマーの指摘[3]を挨つまでもなく、最近数十年来、＜文書性＞ Schriftlichkeitの問題、Schriftの思想を論じる著作がかなり多数あり、そのような形で現れている、解釈学、書記・

書物文化、記録と記憶、認識理論など、テーマに関連する多岐で錯綜した領域と深度とはまさに見渡しがたいほどである。それは、今日精神世界の培養器であるメディアの変遷時期に直面して文化のパラダイム転換の意識から、書かれたものや本・書物などへの省察や危機感そして再評価や希望までも含んでSchriftというテーマが様々に意識されてきたということであろう。とりわけ、記憶・記録、口述性と文書性などの面からのアプローチが目につく（たとえば、新コンスタンツ学派）が、これだけのテーマの広がりを前にして、小論は勢い、幾人かの論者の説の紹介、それらの突き合わせ、そして多少の整理整頓に終わらざるをえないことを予め述べておかねばなるまい。

先回りしていっておくと、小論では、1980年代の始め頃おこなわれた、「ポスト構造主義」と「解釈学」との＜論争＞[4]、いわゆる「ドイツ・フランス論争」を下敷きにして見た場合よく構図が解るのではないかということを前提にしつつ、前者のうちの J. デリダの思想にもとづいて Schrift 概念を検証しようと思うのである。便宜上、彼の思想を＜デリダ理論＞と呼んでおきたい。H.-G. ガーダマーとデリダとの＜論争＞は、擦れ違いのようなはぐらかしのような形で終わったような印象であるが、その後のドイツの研究論文などではガーダマーの論拠の不徹底を突くとともに、晦渋であるにとどまらず変貌の途上にもあるデリダ理論の方になんとか接近を試みようという姿勢が見受けられる。そうは言いながら、多くはデリダ理論のつまみ喰いである感じを免れ得ないし、彼が批判している当の解釈学的概念や形而上学的思考への密輸に過ぎない面もあり、その意味では、あの＜論争＞はすでに決着がついてしまって今日意味を失っているということではないと言わなければならない。その点は後でもう少し触れることになる。

筆者がR. ムジールの作品、とりわけ『特性のない男』にかかわってSchrift概念を導入するこのようなテーマの探求へと誘われることになるのは、この小説が一言でいって「言語の小説」[5]であるというような特質を有するからであるが、このような、あるいは類似の定義が幾つか既にこの２０年ぐらい以来出されてきているにも拘わらず、この定義づけはきちんとした像を結んでいるとは言えないし、十分定着したとも言えない。それは、この小説が長大でありながらもテーマ的にも構成的にも纏まりといえるものを持たず、＜断片＞性格を抱え込んでいるからであり、そのことからも一層、それでなくとも明快さを欠いている「言語の小説」などという概念が曖昧さを増大させ、共通認識にもた

らしえていないからである。

小説『特性のない男』を否定的に見る研究は当初から幾つかのパターンで存在してきた。その中でもこの小説に現れた思想面と文学性という表現面とに向けられた批判がもっとも深刻なものであって、それはひとり『特性のない男』に関してのみに留まらず、現代文学一般に共通する問題であって、その意味ではモデル的に考究するに値すると言ってよかろう。

その内でも真摯な苛立ちをぶっつけているのは R. ピーチュである。<真摯な>というのは、彼がデリダ理論を持ち出しつつなおかつ解釈的コントロールの期しがたい『特性のない男』の方法論や言説の「無内容さ」、「意味欠落」、「断片性格」を立証していく、それ自体大いに納得される面も多分にある行論に対して言えることであり、<苛立ち>というのは、この作品に向けられるのみではなく、学を装う、根拠づけの乏しいジャルゴンに安住したムジール研究のいわゆる“身内”へ向けられていて、痛烈な批判となっている。ムジール研究の方はその後も十分な反論の方式を持ち出し得ていないと言うべきではなかろうか。

ところで、R. ピーチュはあの<論争>の構図で言うと、「解釈学が成立するためには意図されている意味の一義性が前提である」とするガーダマー側にはっきりと立つ。彼は、ムジールにおいてはこの「意味の一義性」が究極的には欠落しているのだとして、「作品に対して“蝕”(élipse) である Schrift が勝利して」、現実内容を喪失した紙の上に「 Schrift が戯れの際限のなさの中へ落ち込んで行く。」と手厳しく言い切っているのだが、実はここで批判に使っている“蝕”(élipse) としての Schrift という概念は、J. デリダからの借用であって、デリダ自身は全く逆に、それは「別の体系に属し」「言語と文法というエピステーメの‥‥」[7] としているわけだから、R. ピーチュの立論はその方向でも考えてみようという学的誠意にかけていると思える。デリダ理論を R. ピーチュがなしたよりもっと忠実に読み解くことで『特性のない男』を彼のような批判を掻い潜りつつ救済しうる可能性もあるとしなくてはならないのではあるまいか。

この一種のムジール文学無効宣言とも読めなくはない論究に比べると、ムジール文学へのデリダ理論の応用の最初期において、萌芽的に使えるものは何でも彼でも押し込んで論を進めたD. ハイトの論著は、同理論への不消化なままの楽観的な寄り掛かりが目立つので、その教科書通りの発言と見えなくはないと

は言え、彼が、「ムジールに逆らって読む」ことが「ムジールに即することになる」ことだとしたテーゼ[8]は、ムジール文学の組成のありようを言い当てている点で、示唆力の高い指摘となっている。

ニーチェ受容及びフロイト理論の独特の一大応用と読めなくはない『特性のない男』を論じるにあたって、この両根源思想を文化史的視点からのみでなく、思想原理、創作原理の面で考察を加えてゆこうとするならば、D. ハイトが手がけたように、この作品をフランスのポスト構造主義が展開している広い場へ持ち出してみるべきであろう。彼は、ニーチェの「脱主体化」(『善悪の彼岸』の有名な一句「それが考える」(Es denkt)、など、類似の思考が至るところに述べられている)ということと、フロイトにおいて「無意識の法則」が打ち建てられたこととを、ともにムジールにおいて現れるメインテーマとして捉えている(p.61)。そうは言っても、もともと「多義性」(「互いに照射しあう語の同時効果」など)とか、「他性」(草稿段階での主人公の名は Anders であり、テーマ的に追求されるのは、der andere Zustandである)ということを言い、「否定性」(特性の無さ、人間中心的様態の無効、物語的時間性の不在化、など)を取り込んだ『特性のない男』に、デリダ理論の脱ロゴス中心主義、主体の非中心化、散種(dissémination)を直結させるのは容易でもありかつ安易ですらあると表現せざるを得まい。D. ハイトは「散種的 Schrift」なる概念をムジールのテクストの特質としているのだが、借用された語句の割合にしては説得力が乏しいのである。

またもう一人、H.-G. ポットが『特性のない男』のテクストは「(ソシュール的意味での)言語と同じような」組成であると考えられるとしているのは大変示唆に富む見解なのだが、彼は論拠の一方ではM. フーコーを使うかと思えば、他方では生とテクストとの収斂性を言い出すのに“解釈学派”に近い M. フランクのいう「世界内存在のテクスト性」をそのまま用いるのである[9]。

この二人の論はムジール文学の従来型の読解の枠を打ち破るそれなりの貢献をしたが、単なる語句の振り回しや異なる観点の安易な混淆で終わるとするならば、元になっているデリダ理論あるいはポスト構造主義の思想の<厳密さ>と<誠実さ>を逆に裏切ってしまうことにもなりかねないのではあるまいか。

(二) ゲーテの『ヴェルター』と『親和力』の読みを巡って

われわれはここで、ディコンストラクティヴな読みというものがどういうも

のであり何を目指しているかを鮮やかに示す例を眺めることで、理解すべき方向のイメージを持つこととしたい。それは、最初に言及したあの「ドイツ・フランス論争」を設定し、その成果を一冊の本に纏めたいわば首謀者であるフランスのゲルマニストである Ph. フォルジェによる、ゲーテ作『若きヴェルターの悩み』の読解であるが[10)]、この中で、デリダ理論派のフォルジェは「シニフィアンの真理」や「意味形成性」(R. バルト) に導かれる立場に立つことによって、今もってドイツでは『ヴェルター』解釈の規範であり暗黙のモデルとして流通してもいる、H.E. ツィンマーマンや E. トゥルンツらの見解に異議を唱えるのである。書かれたものをその多層性において考えようとする彼の態度は、『ヴェルター』の初版本 (1774年) と作者自身による13年後の改訂版との問題でも、<作者の声>により近いであろう初版本に価値を置きがちな多くの研究者たちに抗して、改訂版を重んじるところにも現れている。

それは決して奇矯な、為にする反対意見という通常ありがちな反権威主義の表出となってはいない。むしろ見事なまでのと言ってもよい程の、ロゴス中心主義の呪縛に囚われたままの文学的・哲学的な観念像・言説の打破である。

参照した邦訳での表題は「魂から叫ばれた (書かれた) ?」となっているが、原題は Aus der Seele geschrie(b)en? であって、過去分詞形での「叫んだ」(geschieen) と「書いた」(geschrieben) との重ね合わせが使われているところがポイントである。もともとは H.v. ホーフマンスタールが1896年の講演の中で、作者の人間的な伝記的な事実の方向へと文学作品『ヴェルター』が読まれてしまう危険の種を蒔くことにもなった半分はゲーテ自身に由来するところもある態度、「魂から書く」(von der Seele Schreiben) という態度への警戒を述べた語句であった。Ph. フォルジェは、これを少し変え、かつ b を差し込むことによって二重化し、「対応するシニフィエがもはや存在しないシニフィアン」であるこの b を作品の到るところで拾い上げて行くのだが (たとえば、ロッテのもとを立ち去ったヴェルターが心を寄せる女性が B 嬢である、など)、それはともかく、従来の読みに対して「作者の意図が意味の審級だと思い込んでいる」として悉く逆らい、一義的意味は存在せず、テクストの相互参照関係を暴き出すことによってその中から、ヴェルター自身にもきづかれていない、ヴェルターの言説の複雑さ、多層性、矛盾を読みとって行かねばならないと提案する。

一々の論述の紹介はしないが、一つだけ例証を示すとしたら「ロッテの影絵」の解釈であろう。死に赴くヴェルターがこの影絵を捨てないことの真意はなん

であろうかと問うて、Ph. フォルジェはその影絵の背後にヴェルターを取り巻く沢山の死者たちを重ねてみせる。＜ロッテ＞は多層的になる。そしてLotte という名前には「死者」Toteという文字がアナグラム的に入り込んでいる、という風にも読めるとするのである。彼は、さらに此の＜死の先行性＞の物語の背後に＜父＞の掟とその侵犯の存在を置いて見る。＜父＞とは、ヴェルターの「死去した」実の父、その父の位置を奪う＜父＞としてのヴェルター、社会の父性、そして＜父なる神＞である。そして次のように結論づけるとき、精神や解釈ということに対して「書かれたもの」が持つ最も深刻な問題を指摘したことになろう。「書かれたものは、すべてのシステムを混乱させ狂わせるがゆえに、父の法を必要ともする。そして、父の法を刺し貫き侵犯する。書かれたものは作者をこの身振り中に拘禁する。そしてもちろん解釈者をも。」(p.300)

もとより Ph. フォルジェは解釈ということの「先送り不能であるとともに完遂不能」であることを十分承知した上で、意味論的な特性にたいして、「非連続性によって、(‥‥) 解釈の中で解きほぐされるべき複雑な＜線＞を構成する」統語論的特性の復権をはかるべきであると提言する (p.305)。それはテクストのより広範な理解を可能にするからである。

ここで思い出されるのが、同じくゲーテ作の『親和力』の登場人物の名前 (Charlotte, Otto, Ottilie) の中にもtot、Toteのアナグラムがあるとする J. ヘーリッシュの読みである。(附言すると、EduardとOttilieの頭文字の組み合わせからはギリシャ語のテータ Θ が出来上がり、ヘーリッシュはここにエロスとタナトスの同時存在を見ている。) 彼は、言語と生との、言語と死との「本質的関係」から、人間の存在に言語が「書き込まれている」とするハイデッガーの存在論的言語思想をOntosemiologieと位置づけ、この作品では、名前、文 (Schrift)、刻字、記号などが4人の登場人物の存在、存在関係、彼らの生の謎 (Rätsel) に対して、先行的に・優位的に作用する様を、デリダ理論のTheoreme である「シニフィアンの 優勢」という概念を使いつつ、鮮やかに解明してみせる[11]。

『親和力』については既に J. ヘーリッシュよりも15年も前に J. ヒリス・ミラーが脱構築的な読みを提案していたことをわれわれは想起しておくべきであろう。J. H. ミラーはこの小説に関して、「＜字義通りの＞読み」、「存在論的な読み」、「記号論的な読み」があるとして、続けてこう言う。「このテクストは非均質である。この小説の行う自己解釈は互いに矛盾する。この小説の意

味は、こうした矛盾が必然的なものであるところにこそある。それぞれの読みがそれを覆そうとする反対の読みを生み、単独では現れえないところにこそある。」そしてそうした特質は西欧の伝統一般に内在する「多義性」のゆえなのだとしている[12)]。

しかし、J. ヘーリッシュが『親和力』というまさに当のドイツ文学の伝統の精髄にある作品を同様の観点から論じた上記の論文で、J. カラーの有名な『ディコンストラクション』で採り上げられている J. H. ミラーに全く言及していないところを見ると、アメリカの文学研究で一世を風靡した脱構築理論がドイツにはあまり入って来なかった証拠であろう。

それはともかく、『ヴェルター』を扱った Ph. フォルジェの分析といい、『親和力』を論じた J. ヘーリッシュの立論といい、今後この両作品を考える上で回避できない知見となっていると言ってよかろう。ここには、まだ見渡しがたいが、転換した新しい知の地平が広がりつつある予感がある。それは良し悪しの判断では済まされない問題である。従来の解釈に対して逆の向きの櫛目を入れてゆくことになるが、それはそれで首尾一貫した理論構成に基づき、決して部分的のみの装飾的乱れを作ればよいというものではなく、総体的なものであらねばならず、そのようなものとしてのみ、古いものに対抗し得、かつそれと重なり合って二重化した読みを産出しうるとしなければならない。

彼らの脱構築的な読みの、いわゆる「意味の読み」に対する関係は、約７０年前の1925年に同じく『親和力』を論じたW. ベンヤミンの Fr. グンドルフに対する噛みつきとパラレルであることを想起させる。彼は、ゲーテを神話に仕立て上げようとするグンドルフに対抗して、神話的世界の暴力からの脱却、それとの格闘が後期のゲーテの生と作品には明示されていると見るのである[13)]。

J. ヘーリッシュは、彼の名付けたこの「言語小説」(Sprachroman) での人物らが、不在と Schrift との迷路に囚われていく様を分析し、その際、Schrift というメディアムの理念の淵源を探るのに、ゲーテと同時代のロマン主義理論家Fr. シュレーゲルとJ.W. リッターとを密かに呼び寄せた上で、とりわけ後者の「語と Schrift とは同時的であって、両者の根源は一つである」とする言語哲学的発言を紹介するわけだが、言及が省略されているとはいえ、リッターのこの文言を大きく採り上げたのがほかならぬベンヤミンの『ドイツ哀悼劇の根源』の中でのことであった。

ベンヤミンのSchriftの思想の独特さは前回の拙論でテーマとしたところである。本稿の主眼点からは少しはずれてしまうが、彼の言語思想が、ドイツ・ロマン主義文学理論の継承と、古典的象徴理論の打破を意図する（バロック的）アレゴリー論の核心から出て来るものであるを考慮して、ここで今一度要点を繰り返しておくことにする。

（三）ベンヤミンの Schrift の思想

ベンヤミンのテクストから Schrift に関する言表部分の主なものは次のようなものであった。まず『ドイツ哀悼劇の根源』（1925年）からは[14]、

「アレゴリーは遊戯的なイメージ技法ではなくて、言語のごとく、否、Schrift のごとく、表現である。（‥‥）アレゴリーは Schrift と本質的には異ならない。」（B.I. S.339）

「（このことによって）アレゴリーは Schrift 性格をもつこととなる。アレゴリーは一種の図形（シェーマ）である。」（B.I. S.359）

「アレゴリー的洞察は事物や作品を一瞬にして刺激的(erregende) Schrift に変えてしまう。」（B.I. S.352）

「Schrift は読まれた内容の中へ、その図形（シェーマ）として入り込むのだ。」（B.I. S.388）

『模倣能力について』（1933年）からは、

「［模倣の能力によって生まれる］Schrift は、言語と並んで、非感性的類似、非感性的照応の貯蔵庫となった。（‥‥）かくして、Schrift の文字面のテクストが［伝達的な］基盤となって、そこでのみ判じ絵が形成されうるのである。」（B.I. S.339）

そして『カフカ論』（1934年）からは、

「反転とは、現存在を Schrift へと変容させる、勉学の方向のことだ。」（B.II. S.437）

などが拾い出されうる。われわれは、ベンヤミンが彼の言う思考断片の場所として、「中断」や「不連続」や「迂回」と関連づけられた、音声言語に対置される Schrift に着目している思考プロセスを重視すべきであろう。そして『ドイツ哀悼劇の根源』では中心概念であるアレゴリーとSchriftとが結びつけられているのであるが、意味内容や脈絡を失って理解不可能となって、ただ意味する形式として表現としての姿を曝すアレゴリーは、事物の散乱する廃墟にさえなぞらえられた。そのような事物、事象、アレゴリーそしてSchriftは、

はたして読まれうるものになるのであろうか、またそこには何がどのように読まれうるのだろうか。読まれうるとして何時どこで誰によってであろうか。さらに言えば、読まれえずして残存し廃墟となっているものはなにを意味するのであろうか。<読まれる>ことを待機するアレゴリーという世界洞察の方法によってこそ意味救出の方式が存するとベンヤミンは考える。Schrift が弁証法的緊張をおのれの中に内在させるのはそのようにしてである。後年ベンヤミンは『パッサージュ』論のためのメモの中でさかんに「弁証法的形象」とか「静止状態の弁証法」という概念を使って事象と言語、形象と言語とを繋ごうと努める。

創見に満ちた『ドイツ哀悼劇の根源』においてベンヤミンはバロック的なアレゴリー概念を新しい光のもとに救出するに当たって、それを古典的芸術概念である<象徴>との対比関係の中で明らかにしようとする。

「象徴においては、没落の理想化とともに、自然の変容せる顔貌が救済の光の中で束の間すがたを現わすのに対して、アレゴリーにおいては歴史の死相が凝固した原光景として観察者の眼前に広がる。(‥‥) 意味と死とは、被造物の恩寵なき罪状態にあってはともに萌芽の形で互いに密接に絡み合っているが、歴史的展開を経つつ、熟成するのだ。」(B.I. S.343)

ベンヤミンは、この対比関係はドイツ・ロマン派から引き継がれたものであり、ここには彼等が「記号学の領域に持ち込んだ時間というカテゴリー」の下で考えられたものであるとして、アレゴリーと時間、あるいは歴史との深い関係を取り出すのである。歴史は世界の「受難史」であり、意味は死との関係の中で得られる。このような歴史観は後年の彼の独特の歴史哲学に収斂して行くものである。それは、死と絡まりあった<意味>を観察者の立つ<今> Jetzt-zeitにおいて読みとることである。

象徴とアレゴリーとを対立的に捉えていることから、われわれは同じく両概念の対立的転倒を意図する P. ド・マンの修辞法重視の文学観をここに想起することになる。アメリカのテクスト解釈的文芸理論を展開したイェール学派の総帥にして脱構築理論の提唱者といってよい P. ド・マンは、ベンヤミンとは全く別個にであるが、やはり現代文学での、象徴に対してのアレゴリーの重要さを一貫して理論化した。彼は、「シンボルは神秘的な結びつけを行うもの、アレゴリーは言語と時間性を“正しく”理解するものと考えることによって、

アレゴリーの方を意味作用の基本に」置いたのである[15]。＜言語＞と＜時間性＞とを取り上げている点では、ベンヤミンと共通するということを見ておけばよいだろう。

ベンヤミンに関してその歴史観などこれ以上さらに述べるのは小論の範囲を超えて行くことになるので、アレゴリーとして見られた Schrift に関連する考究への示唆として、ここで次のようなアスペクトを挙げておくことに止めたい。

まず第一は S.ヴァイゲルが、フロイトの精神分析学がいう＜記憶痕跡＞の考え方が後期ベンヤミンの言語観に受容されていることを重視すべきだとしていることだ[16]。確かに、1920年代・30年代にベンヤミンはフロイトの著作をかなり読んでいるようだ。その後に書かれた言語論では、言語の、とりわけ Schrift の「非感性的類似」をもととする記憶保存庫の読みが強調されるが、この時のSchriftmodellにフロイト流の＜無意識の言語＞を対比してみようという提案はありえよう。最後の著作群『パッサージュ』論では、パリや旧ベルリンのような都市に歴史的に堆積した経験・記憶を「集団の無意識」が造り出したSchriftとして読むという考え方が述べられるし、人間の身体・身体性と言語との関連が考察対象となる。S. ヴァイゲルはベンヤミンのそれらの思考をフロイト精神分析学のタームを使って解析しうるのだとしている(S.33, 94 f., 122)。

もう一点は、ベンヤミンといわゆるデリダ理論との近接性のことである。J. デリダは＜翻訳＞ということをベンヤミンの『翻訳者の使命』(1922年) に沿って読み解いているが[17]、両者を並べて論究したA. ヒルシュは、とりわけ、翻訳とオリジナルとを形而上学的な言語哲学のいう位階関係・前後関係を廃棄したところで捉えようとしたベンヤミンと、本来的なものと付加的な＜代補＞との逆転を述べるデリダの脱構築的思考とに「驚くべき対応」を見ている[18]。

しかし、翻訳というテーマからははずれるということがあるにしろ、意図的にかそうでないか A.ヒルシュが W.メニングハウスの2冊目のベンヤミン関係論文『無限の二重化』に言及していないのは理解できない[19]。この中で W. メニングハウスは、デリダ理論とは「ベンヤミンによって克明に引き出された、初期ドイツ・ロマン派の記号存在論の幾つかのフィギュールに最大限の先鋭化を施した」もの、ないしは施しただけのものと考えられるとし、またロマン派の思考にはデリダの理論に対しての先駆性があるばかりでなく、それよりも

「より包括的で、多面的である」とさえしている(S.115, 131)。だが、この説はひとまず承認できるとして、指摘して措かねばならないのは、W. メニングハウスがこのようにロマン派を<先鋭化して>解釈しうるのは、また彼の読み解きがより鮮明に意味を持ちうるのは、デリダ理論を介してではないか、ということである。その傍証は彼が M.フランクや D.ヘンリッヒを論駁するのにデリダ理論を持ち出していることにも看て取れる(S.267 ff.)。

(四) カフカ、「現存在を Schrift へ」

ここで現代文学に現れたSchriftを見て行くことにしよう。それにはベンヤミンも逸早くその文学のSchrift性格を見抜いていた F.カフカをまず取り上げるべきだろう。「現存在をSchriftへ……」というのは、前出のごとくベンヤミンからの引用である。よく知られていることだが、カフカ自ら「私は文学から成り立っている」、とか「私が小説なのであり、私が物語なのだ」という発言を生涯に亘って到るところで行なってもいる。そのような関連から、書くことと生きること、世界内でのSchriftの存在、手紙あるいは日記、書くプロセスの物語化、肉体のSchrift化、身体に刻まれるSchrift、声と文字、名前、アナグラム、法としてのSchrift、そしてSchriftの廃棄、などなど多種多様なテーマが浮かび上がる文学世界である。自らを犠牲に供して作り上げたSchriftのもたらす幸福という局面もあるだろう。しかし、カフカにとって最も深刻なSchriftの基層はどこに存在しているのであろうか。

カフカの『失踪者』は必ずしもカフカ作品の代表的なものではないが、やはりSchriftテーマが多層的に現れているので、ここで取り上げてみよう。この未完に終わった小説は、今もって邦訳などでは『アメリカ』という古いままの呼称が流布しているが、未定稿部分の扱いを含め構成の問題が研究上のテーマの一つになっている。それは<内容>の解釈のいかんにも係わってくるからである。『アメリカ』というタイトルをつけた M. ブロートは、作者カフカその人から「微笑を浮かべつつ」、「謎めいた言葉で」主人公カール・ロスマンがやがて「職業と自由と後ろ楯、そればかりか故郷と両親を取り戻す」ことになると語ったことを根拠に、言うところの<アメリカ小説>を<救済>の方向で読もうとしたのであるが[20]、他方、よく知られているように、全く逆の悲劇的な結末のことがカフカ自身の『日記』の中で「最終的には処罰として殺される」と書きとめられているし[21]、タイトルについても作者は『失踪者』(Der

Verschollene）を示唆している。この後の方の観点から、主人公は「失踪者」であり、「挫折し」「死を迎える」という読み解きが一般化することになるが、誰にとっての「失踪」であるかとなると、答えは簡単ではないことになる。故郷の両親にとっての「失踪」であれば、捜索とか帰還とかの別のテーマが出て来ることになるだろうし、かといって未完結の部分でやがて読者の前から「失踪」する、とか、主人公自らの自我からの「失踪」である、などの穿った読み方も考えられなくはないとしても、十分説得的にはなり得ないだろう。

『失踪者』を一貫してSchriftテーマの側から読み解こうとするJ. ヴォルフラートは、パースペクティヴ・フィギュアたる主人公が読む者にとっては最初から最後まで現前しているという事態の故に、「作品内在的」には「失踪」は起こり得ないとし、別の観点を持ち出す。すなわち、法律を学んだ作者カフカにとっても「失踪」という法律用語は、当該者の実在そのものよりも、届け出や情報などにもとづいて作成される書面上の概念であるのであって、いわば実在に対するSchriftの優位、身体（Körper）のSchriftへの転換というテーマがここにはあらわれているとするのである[22)]。

この説の根底には、カフカの文学創造が「書くこと」（schreiben）の形象化、書くという言語活動と生きるという実存問題との収斂の具象化であるという、前述したような特異なありようへの洞察があるのだが、J. ヴォルフラートはこのように述べて、魅力的な結論を引き出す。彼は、「オクラホマの自然劇場」と M. ブロートが表題をつけた（一応の）最終章での、主人公カールらが乗ったオクラホマへ向かう列車が「山中へ」入り込む様を描く最後の文を捉えて、その「山中」をSchriftと同置し、主人公の「その中への消滅」を「身体」のSchriftへのメタフォリカルな転換と読み解くのである。断章の末尾に置かれた、長くて異様な構造の文に注目し、この「暗く狭隘で切れ切れになった何重もの谷間」とその底（Abgrund）には幾筋もの「波立つ流れ」を抱え込ん山容を描き出す文自体が幾重にも襞目を持ち筋別れして、まさにこの山容と同じななっていて、「書くことの波動」（Wellengang des Schreibens）になっていること、つまりはSchriftがSchriftを描いているのだと捉えている。そして、この文での主語がmanに変じていることも見逃さない。つまり、視点が主人公カールにではなく、いわばSchriftそのものに移っているのだと見るのである（p.154）。さらに彼は、断片『プロメテウス』での「説明しがたい岩山」がSchriftを表しているのとちょうどパラレルであることを示して論をより説得的に補強している。また、最終段階で主人公カールが「ネグロ」（Negro）と名乗るこ

とになるのも、白紙の上のインキの黒色に他ならないとし、そのように収斂して行く『失踪者』全体を、カフカの「世界のSchrift化」(Verschriftung der Welt) のプログラムなのだという結論に到るのである (p.157 et passim)。

ただし、われわれがJ. ヴォルフラートの行論の楽観主義的なところに飽きたらないとすれば、作品『失踪者』から一部には由来するところもあるとしても、彼の言う「世界のSchrift化」の概念の不徹底さにあるとしなくてはなるまい。つまり、今日の文明のコンテクストで見た場合のこの概念の深刻さやアンビヴァレンツが十分には伝わって来ないのである。

その点でやはりSchriftをキーワードにしてカフカと彼の文学上の先蹤であるフローベールとを並べて論じたD. クレーマーの方が問題のより解きがたい深みを垣間見させてくれると言えよう。それは、視点を作品や登場人物から、書いている作者自身とSchriftとの関係へと移したことによって現代文学の創造の局面でのアポリアに迫り得ているからである。すなわち、この二人の作家にあっては書くということが独自の意味、即ち文学的なSchriftへ入り込むことによる「別の自己」への変容を意図するということであって、そこにおいてはUn-Personやdas Andereに直面することになる点を逃していないからである[23)]。

もう一人、カフカが「言いうること、書きうること」の限界を突破するために次第に身につけるようになった独自のSchriftの戦術に考察を加えて、それを「二重のSchriftのシステム」と呼んでいる P.-A. アルトの論を見ておこう。言うまでもなく、カフカにおける二重化や反復や打ち消しなどのレトリック手法はいち早く気づかれていたことであるが、P.-A. アルトはこれをカフカの全作品に及ぼしうる整合的でシステマティックな創造美学的概念となしうるのではないかと、ある脚注の中で展望を述べている。

カフカのみならず、モデルネの作家たちが直面していたのは文学伝統に乗っかった言語表現法、Repräsentationの限界であった。カフカはメタファー的言表を採用しなかった。そうではなく、表現の限界点において新しい領域を作り出すために物事のあるがままの「名付け」benennenを可能にするためSchriftの層を分割するのである。それを P.-A. アルトは「二重のSchrift」と呼ぶのである。「相反する主張の同時性、解消不能な矛盾、相反することの統合の外観」などの形式を用いて、言表の意味を「浮遊状態に、二重化し、多義的に」しておくことなのである。そこには、「意味や意義の選びようの無さ」が現出

する[20]。

このような美的モデルネの道具というべき「二重のSchrift」による言い表しがたいものの詩学をそれぞれ創出した文学者として、P.-A. アルトはさらにリルケやホーフマンスタールそして St. ゲオルゲを取り上げている。「言語懐疑」を鮮明に印象深く文学化した作品として目されることの多いホーフマンスタールの『チャンドス卿の手紙』ではメタファー語法が「二重のSchrift」を喚び起し、リルケの『マルテの手記』ではマルテが他郷のパリという言語の二重化した舞台において自己表現する契機としての他者のSchriftの書き写しが「二重のSchrift」となる(p.480)。

ただし、P.-A. アルトが述べるところでは、如何にして「二重のSchrift」が事物のあるがままの姿(p.488)を表し得るのかのメカニズムがはっきりしないし、また、カフカの創作プロセスにおいて「身体と言語とが互いに連鎖されている」(p.485) ということの特異さが何を意味するかの説明が不十分であるのだが、これらは、<二重化>や<同時性>の概念とすべて絡み合わせるならば、デリダ理論を用いることで論を整合化できるのではないかという予感がする。ましてや<時間>という概念を持ち込むとするならばなおさらであろう。

(五) ホーフマンスタール、リルケ、ハントケ

小論は、現代文学を考究するに当たってSchrift概念をキーワードにしている論考を集めて比較検討することを主眼におくものであるが、ここではカフカにつづいてさらにホーフマンスタール、リルケそしてハントケを取り扱った論文を見てゆくことにする。

時間というテーマにはすでに触れたが、このテーマを取り上げている U. シュタイナーの考察を瞥見することで問題を一応視野に納めうるかと思われる。部分的にデリダ理論を取り込みながら論述しているU. シュタイナーの行論は、大部の著作であって多岐にわたる問題をカバーしてはいるものの残念ながら概念規定の錯綜した曖昧さと論理性の乏しさゆえに明快な像を結びがたいとしなくてはならない。それでも先行する研究者らへの反駁を織りまぜながら独自性のある観点を展開しているところを点綴して行くと、幾つかの拾い出すべき創見が見あたる[25]。

Schriftと時間、あるいはSchriftの時間という問題は範囲を狭く限定してみ

ても、書く場合の、そして読む場合の時間と意識、Schrift自体のもつ時間性、そしてSchriftが内容としている時間、などの諸点がある。そして、時間というものは厳密な意味では意識において捉えることができない。現前と不在との、遂行的時間と参照的時間との同時性というパラドクシーがあるためである。Schriftについても書く場合・読む場合とも同じようなパラドクシーが存する。時間は一種の空間性において意識される。Schriftも空間化される。

U. シュタイナーは、ヘーゲルの意識哲学を呼び出しつつ、近代（Moderne）における意識、主観性がSchriftによって生成し・形成されたという面を強調する。と同時に「主観性の散乱ないし分解のファクター」でもあるということがはっきりしてきた二重性において問題化する。このことはそれ自体新見解というわけではないが、彼はここから「Schrift は意識を意識にもたらし、時間を意識にもたらす。」時間はまた「主観性の統一と主権を掘り崩すから」問題領域は無意識をも含み込むことになる、などのテーゼを導き出すのである。そうするとここに、無意識を含めての意識、時間、Schriftの間に等式が成り立つことになる。「時間自体がSchriftなのである、あるいはもっと巧みに表現すれば、時間が書く。」そこで、U. シュタイナーはこのようなことを果たしうるのは、もちろん論理学ではなく、形式（Form）というものを持ちうる文学にして初めて可能なのではないかとする。(S.17 f. & S.50)。

このように「時間から、Schriftの時間から空間をもぎ取る技術としての文学」の実践者としてU. シュタイナーが選び出したのはH. v. ホーフマンスタールとR. M. リルケである。両詩人には共通して、時間への鋭い意識が生の根底にあるとともに、文学創造を直接動かしていることと、彼等の文筆活動には「言語に対するSchriftの優位」ということを抽出してくるというより最初から前提とした上での論の組み立てを行っている。この前提を彼はデリダ理論に委ねていると考えてよかろう。

ここで両詩人の作品に関してのU. シュタイナーの目立った論述をざっと取り上げてみよう。

ホーフマンスタールの『途上の幸福』では、すれ違って行く船の上の女性は「読むことと表象することの自動詞性」(S.76.)をあらわすが、また彼女への憧憬は時間内存在である書き手自身の鏡像化と言ってよいだろう。Schriftはたとえばこちらでの本を置く動作と向こうでの本を取り上げる動作との反転関係、そしてまた去って行く船の横腹に読める "La Fortune" （＜幸福＞の女神）

というSchrift、つまり、全体が時間のアレゴリー、Schriftのアレゴリーとして読める。それは、時間の中にある意識の不幸、幸福と不幸の交差とを形象化している。

『痴人と死』は「人生を本の如くに経験する」ことの、「直接的経験を疎外するテクスト化 、Schriftというメディアの介在」、即ち「他者の無意識の舞台と化した Ich 」(S.17 f.) の不幸のドラマ的表白であるが、U. シュタイナーは、最終場面での一種の逆転について、そこには「存在と記号とのアレゴリカルな構造の自己指示的確認によって同様にして成功した読解」ということがある、と言う(S.114) 。

また、言語懐疑の文学化として解されることの多い『チャンドス卿の手紙』も、U. シュタイナーは「Schrift の時間」へのアレゴリーとして読めるのだと言う(S.25) 。チャンドスの意識に絡みついた危機は、話し言葉ではなく、Schriftに由来するという指摘はユニークであろう。ここではSchriftを黙読する「自らの内的声を聴く」(デリダ) 際の［内的な］発話とその聴取との乖離という危機のことを言っている。それゆえにこそチャンドスは転じて「みずからの難題を、言語によってではなくSchriftによって名指し得るのである。」(S.114) U. シュタイナーは『チャンドス卿の手紙』の後半に描かれる、主人公の内面と物世界の言葉を絶した照応関係について触れていないが、確かにこの「幸福感」とは逆にチャンドスは「信じられないほどの空虚な生活」を続けるのだし、これは哲学者 Fr. ベーコンへの＜最後の＞手紙となり、「苦痛なほど異常な」理由から今後書物を「書かない」という宣言が伝えられてもいる。チャンドスの内部の或る種の＜死＞が暗示されている。なお、U. シュタイナーはこの作品あたりを境にホーフマンスタールが＜アレゴリー＞から＜象徴＞へと保守的な転換をしてゆくことを論の根底に置いている。

U. シュタイナーは、現代における文学の一特質をその「自己指示性」において考えているが、ホーフマンスタールにそれを見る以上に、リルケの『マルテの手記』を読み解くキーワードとしている。文学が対象の真実内容を描くばかりでなく、みずからが素材化し、自己指示性を強化して行くのである。

彼は、『マルテの手記』は、「近代から現代への変革---想像的なものの断片化、意味の形象喪失、そして逆に、リアルなものの分裂病的過剰---の中心的ドキュメント」として理解すべきであるとする(S.326)。

マルテは事物形象の充満する現実から「書き物机」に引き下がって、「＜時間＞を描き出すことによって、形象と意味づけ」とを獲得せんとし、「語と事

物との厄介な出会いの交点に赴く」。マルテは、書くことによって、その時よりは自分が書かれるのである(S.335)。

ここにおいて、ヨーロッパ世界に固定観念的に作用した、「文字は殺すが、精神は活きづかせる」という、聖書でのパウルの断言の最も深刻な帰結として、「Schrift は<死>であり、生は<死>である」ことになるが、U. シュタイナーによれば、現代では、実存形態として<書くこと>が「主体、人間、そして生の機能喪失を代補する」ものとしてある。生と<書くこと>とがいわば逆転する。マルテも「私は書いた、私は私の人生を持った」と書く。書き手は自らを<書くこと>に犠牲として供するというメシア的ジェスチャーによって、Schriftの中に蘇ることを願うのだ。U. シュタイナーは、「すくなくとも幻像的には、主体の前反省的な自己との和解状態が生じうるのだ」として、そこに<救済>のイメージを見る(S.356)。ただし、それはやはり幻像に留まるだろう。ある時マルテの手は、殆ど離人症的に「勝手に」「彼が思いもしない言葉を書こうする」[26]のだから・・・。U. シュタイナーは結論的に、マルテにはSchriftの時間を空間化することが最終的には成功しなかったとしている(S. 401)。

Schriftを<不在性>との関連で扱った M. シュミッツ-エマンスもその唖然とするほどにも膨大な量の著書の中で、Schrift概念の肯定面と否定面との両方での展開を歴史的に跡づけるとともに、現代文学に於いては「Schrift こそは文学を支えて行く最後の<根拠>である」[27]、というように、この概念の重要度を描き出して見せている。彼女の思考の一貫した道筋は、二千年来の「世界の書(Weltschrift)の譬喩」のトポスが新しい意味において今日の文学に蘇生していることを示すところにある。つまり、かつては神の慮った<自然>や<世界>を読みとることがSchriftと関連づけられてきたが、今日それに代わって存在するのは文学作品が織りなす世界、Schriftreich なのだと論じる。それは、対象を欠いた、SchriftをSchriftが読み解くという自己言及的な循環世界ということになろう。ここで同著者は、テクスト文芸理論から Intertextualität という概念を借り出してくるが (S.533)、もとよりそれは借りただけに過ぎず、厳密な定義にはなっていない。

もう一方の概念である<不在性>とは、つまりプラトンが口頭の直接性に比して語る主体の不在であるとして、その代替性、間接性、虚偽性を最も強く非難するSchriftの特質の一つであるのだが[28]、M. シュミッツ-エマンスは、世

界と人間存在が乖離した現代においては、却って直接の現前を約束するかに見える口頭的ことばの方こそが偽りの代理であるのであって、<Ich>の作り出す世界は疑わしいではないかとして、そうではなく、不在である<主体>、<Ich>、<意味>を不在のままに陰画として、否定を介して、浮かび上がらせるのが現代の文学の仕事なのであり、現代の文学的Schriftは、この不在性の意識の下にあるとともに、且つそのパラドクシカルな魅惑の刻印を押されているとする(S.256)。

たしかに、これはうまく表現された言い方である。しかし、そのパラドクシーの真の意味は何かと訊ねてみるとたちまちあやふやにならざるを得ない。つまり、主体や意味が不在だとし、反転してその不在性を暗示的にネガティヴに描き出す、という場合、その主体や意味とは何であろうか。いや、たとえ架空のSchriftreichの中であれ、そこには不在の筈の主体や意味が予測されていることになるという、どうしてもついて回る循環論法があるのではないか。そのようなことからM. シュミッツ-エマンスが依拠したくなるのはM. フランクの説くところの主体性・個我性Individualität の哲学である。彼女の論は、全体に概念の無媒介的連結からくる多幸症的な論調で、概念使用が上滑りになってしまう方法論的間違いと根拠の薄いジンテーゼとを指摘せざるを得ず、それは割り引くにしても、我々は今問うているテーマがなぜこのような混乱した論に迷い込むことになるのかを逆に問い直してゆく必要があろう。それは、例の<論争>の解きがたさと関わってくるからである。

M. シュミッツ-エマンスがいうところのSchriftreichに見いだす現代文学者は、マラルメに始まり、G. アイヒ、M. フリッシュ、I. バハマン、I. カルヴィーノ、J. L. ボルヘスらだが、ここでは先述とのつながりである「言語危機」の表明者H. v. ホーフマンスタールと、オーストリア生まれの現役作家P. ハントケとを論じた部分を紹介しておこう。

ホーフマンスタールの『チャンドス卿の手紙』の書き手であるチャンドス卿の言語懐疑と受け手である近代前期の経験論哲学者 Fr. ベーコンとを相補関係で見るべきだ、と M. シュミッツ-エマンスは提案する。相補的というのは、一方が認識対象の世界を原理的に<読みうる>Schriftであるとしているのにたいして、他方は、言語的主体にとって世界が不可逆的に<解読不可能>になってしまったという事態なのだが、両者において世界が記号の総体であることにおいては、同軸上にある正と反の関係だからである。かつてはチャンドス卿に

とっても＜読みうる＞世界の一致した像があった。

前記の U. シュタイナーと違って彼女は、チャンドスの内面と物世界の幸福な照応関係を、＜真の事物世界＞が浮かび上がってくる、という、相も変わらぬ Weltschriftmetaphorで、人間の言語では読み解けない「原・テクスト/事物言語」の符号の解明しがたさに注目させるのが文学の役割である、という方向で読み解く(S.201)。詩的言語の拡大ということを言うのはよいが、「ユートピア的Schrift」というようなところまで連れて行かれると、正直のところそのミスティフィケーションに唖然とせざるを得なくなる。

さらにP. ハントケの文学創造についてもM. シュミッツ-エマンスは、「対象世界が多様にSchrift譬喩を使って描かれている」(S.237) ことを指摘し、その際、事物の＜ことば＞を読むというのではなく、事物の意味の秩序が喪われた現代では関係は逆転して、「言語が、Schriftが、名づけることによってそれに意味を付与して行く」(S.256) 、そういった文学世界であるという特色を浮かび上がらせている。P. ハントケの一連の主人公たちはかのチャンドス卿に近親であることになる。

ついでに書き加えると、M. フォルマーもやはり P. ハントケにおいて「世界の書」のトポスがなお息づいてその創作原理にまでなっていることを論じている[29]。たとえば、ハントケの比較的最近の作である『反復』という多層的な意味の込められた表題を持つ物語が取り上げられているが、この作品の内部でも幾重にもSchriftが対象となりテーマ化されている。

この物語では、主人公が彼を取り巻く多様な「書かれたもの」Schriftを読む、という＜反復＞、そして自分の過去や現在を書くことによって＜反復＞することで自己を再び見いだすプロセスを語ったもので、「書き」と「読み」とが同時に行われ、そして最後には「物語」そのものへの呼びかけが行われるという入子細工になっている。「物語よ、繰り返せ、(‥‥) 物語よ、万歳。物語はさらに進んで行かねばならない。」[30]

M. フォルマーは、人生的連関を失った主人公フィリプにとっては、事物が記号へ、字母へと変じ、事物は次々と並んで「意味を持たないSchriftとなり、Schriftは事物を越えて何か別のものを指示しているように」見えてくる事態を挙げ、かくして「記号の領域が第二の、別の現実となり、そこでは個人は事後的に自分の伝記 (Bio-Graphie) のテクストを書くことで Existenz の意味を見つけて行く」という、ハントケの新たな創作原理を指摘している(S.251)。

M. フォルマーの論でユニークなのは、P. ハントケの文学観・文学創造にニーチェの思想との類縁性を見て行こうとするところである。ハントケ自身がニーチェの愛読者であるから、当然のテーマではあるが、M. フォルマーは、ニーチェが説いたような「言語にかかわる仕事」を克明にやり遂げることによってのみ個人は「現実の像を多層化できる」のであって、しかも「事物の方から言語を見るのではなく、言語自体を＜光学＞ Optik として捉えることによってである」としている。これが P. ハントケの手法を述べたものであることは言うまでもない[31)]。われわれはここで H.v. ホーフマンスタールのニーチェ受容のことも併せて考えることができる。そこでも言語と主体の一種の逆転を剔抉したニーチェが問題になるはずである。

ニーチェが登場したところで、われわれも場面転換をしよう。M. フォルマーは、ニーチェの独特のタームである＜遊戯＞ Spielが P. ハントケの創作で重要なキーワードになっていることを指摘しているのであるが、E. ベーラーは、この＜遊戯・賭＞ Spiel-Wetteをヘーゲルが捉え損ねていることをJ. デリダがヘーゲルの脱構築的読みの一契機としていることを引用しつつ、かの＜独仏論争＞での、彼の理解するデリダ理論の優位を認めるための強化に使っている[32)]。尤も、デリダ自身は、ヘーゲル哲学の超えがたさを繰り返し強調しているし、よく知られているごとく、ヘーゲルを「Schrift ＜エクリチュール＞の最初の思想家と呼んでいるのだが・・・。また、デリダの＜差延＞概念とヘーゲルの＜否定性＞との思想内の作用の上での近さを指摘する論は多い。[33)]

（五）＜意味の読み＞・＜Schriftの読み＞

現代文学作品に顕在あるいは潜在するSchriftの概念の意味を探ろうとした小論であったが、既にその範囲を越えるテーマであるとは言え、到る処であの＜独仏論争＞、つまりデリダ理論に代表されるポスト構造主義の諸思想と解釈学派との＜論争＞ないし＜対話＞に繰り返し差戻されるように出会って来た。これを突破しないことには隔靴掻痒の思いから逃れられないし、小論の或る破綻を意味しかねないのだが、この問題圏の見渡しの容易ならぬこともあり、別の機会に譲ることにして、ここでは全くの粗描を行なうことで満足することとしたい。

上述の E.ベーラーは、＜論争＞の当事者ではないが、ロマン主義の研究家

であることからとりわけFr.シュレーゲルの反解釈学的思想、フロイトの意識・無意識の二重化、そしてニーチェの多重視点を出発点にして、デリダ理論に与する見解を述べている。E.ベーラーも、そのFr.シュレーゲルが「理解し難さ」、「無理解」、そして「カオス」をも持ち出して、シュライアーマッハーの解釈学の枠を打破せんとした如く、ことごとくこの宗教哲学者の同一性哲学の理念に依拠しつつ、デリダの中心概念である＜差延作用＞différanceを個的なものdas Individuelleの概念で釈義せんとするM.フランクに対して異議を唱えるのである(op.cit.S.163)。デリダもあの＜論争＞に寄せたエセーで、対者と共通的な範疇を使用することを巧みに避けつつ、ガーダマー流の解釈学が最後的には普遍性を、全体性を、意味の統一性を潜称してしまうことを、「断裂としての理解」や「媒介の停止」の観点を持ち得ないものであることを、ハイデガーのニーチェ解釈の限界を示すという迂回路によって暗に説いたのであった。

＜論争＞のまとめ役の編者 Ph.フォルジェも既に早く同じ角度からガーダマー批判を行なっていた。彼は、その解釈学の根幹が真の意味での他性・外部性・断裂といったものを捉え得ないこと、デリダの指摘どおり例えばニーチェは勿論、精神分析的な解釈や、また遂に「シニフィアンの優勢」といったコンセプトを理解し得ないことなどを挙げている[34]。そして、両陣営の“近さ”“接近の試み”に言及することで片手落ちにならないようにしながらも、やはり「架橋不可能」であることを論拠づけていく。フォルジェはまた、ガーダマーが主張するコミュニケーション行為に近い「地平融合モデル」での対話は、「所詮は思弁的なモノローグ」に過ぎないのではないかという疑念を表明している。

また序でに言及すると、A.ヒルシュも E.レヴィナスの「他者性」「異質性」の概念を援用してガーダマーの＜対話＞の考えは「デリダの脱構築を越えられるものではない」と断じている[35]。これは、前述の M.フランクがガーダマー批判に持ち出している観点と同じである。つまり M.フランクは、シュライアーマッハー流の＜主体＞や＜個別性＞の観念の堡壘から出ることなく、しかもデリダ理論や J.ラカンの＜他者＞概念を自分の方に引き寄せることで、両陣営の「架橋」を演出するかのようである[36]。

なぜこのような錯綜した議論になってゆくのであろうか。それは、よく指摘されるように、「現前性の形而上学」、ロゴス中心主義、理性を否定してゆこうとするデリダの思想が、それを述べるのにまさに形而上学の言葉を、理性概念

を使わざるをえないぎりぎりの隘路を通って行くものであり、また体系的思想構造になっていないものであるために、コンテキスト的な実体として考え難い為であろう。

そこで、デリダ理論の有効性をあまり認めない立場や見解ももちろん多いのである。

まず周知の、マルクシズム文芸理論を標榜する T.イーグルトンで、彼は面前の論敵、アメリカ文学理論の＜脱構築派＞をこき下ろすのだが、デリダに対しては、意味ないし言説への無頓着を批判しつつも、政治的文脈のなかでのその思想の必然性を一定程度認め、生産性を持ちうることに着目もしている[37]。

ドイツ語圏で第一に挙げるべきは言うまでもなくフランクフルト学派の社会学者 J.ハーバーマスである。彼はデリダを、ニーチェ～ハイデッガーの系譜での西欧的合理性からの離反として規定し、その地点から結局のところデリダの思想は、超越論的な主観性哲学・根源性哲学に捕われたままであるとしている。[38]

彼の『近代の哲学的ディスクルス』におけるデリダ理論の解析、とりわけそのフッサール批判を通してのデリダの意味理論、時間意識、主体、エクリチュールなどの理論構築の解説は簡にして要を得ており格好の手引の役割をしてくれる。彼のデリダ批判のアスペクトは色々あるが、とりわけ彼の立脚点からして最も許し難いであろうことは、意図されていると思われる、哲学と文学との差異の解消であって、そのようなことは、思考の真摯さ、生産的能力を阻害するに繋がる、と断じている。つまり、デリダは言語の詩的側面である「世界開示的機能を表に立てるあまり、その問題解決的能力を無きに等しくしている。」(S.241) すべてはレトリックに帰してしまうかに見えるのである。そこからしてハーバーマスは、アメリカ＜脱構築派＞の理論家 J.カラーらの文学批評に表れている「風土病のような自己懐疑」からのデリダ受容に対して鋭い批判を向けるのである。ただ、J.ハーバーマスの断定の特異な点は、デリダ思想をユダヤ神秘主義の文脈で理解しようとしている節があることだ。それは、彼の師の世代にあたるW.ベンヤミンが辛うじてユダヤ思想と唯物論とを、つまりは神秘主義と啓蒙とを「統合」し得ていたと見る見方からのデリダへの逆照射なのであろう。

しかし、そのハーバーマスにしても「言語への転回」といわれる、自らの理論の深化のためへの言語論の取り入れを真剣に考察しようとする姿勢がある。デリダらのフランスの思想が大きなインパクトになっているとしてよかろう。

暗々裡にそのハーバーマスの解明を踏まえてであろうが、デリダ理論の不備を突くという形の論考をなす動きも出ている。その一例として U.テーヴェスの考究を紹介してみると、彼は、まず「デリダ哲学というものが存在する」と考えるべきだとして、対象の明確な確立を宣告し、その上でそれへの批判の方向を探ろうとする。[39] 彼は、デリダの言語論・記号論を追究して、デリダは＜意味＞の理論の欠落に対して責任があるとする。そしてデリダが言語の構造から導き出して来ることになる筈の＜意味＞の可能性は、解釈学派の理解概念に見かけ以上に近いのだ、ともしている(S.65 f.)。U.テーヴェスの言おうとするのは、結局のところ＜主体＞の概念なしでは済まされないではないか、それが後期デリダの＜混乱＞の元となっているのではないかということのようで、最終的には、ヴィーコ、クザヌス、J. ベーメ、シュライアーマッハー、ハーマン、シェリングらの言語神秘主義や超越論哲学の伝統の方へに結びつけようとしている。

このような理解は一面性の謗りを免れないが、今日の或る傾向を代表しているとも言える。それは、最近での＜形而上学への回帰＞の現象である。英米系の分析哲学においても、自己意識・自己記述の問題の重要さが改めて認識されつつあるという指摘がある[40]。

これらデリダ理論への批判にも肯綮に中っているところが多いであろう。だが、単にそれを形而上学的な方向に逆向きに引っ張って格納すればよいという問題ではない筈だ。それではこの理論のもつ真に創造的な面が見失われる。活用して行かねばならないものなのだ。
われわれは、この理論とそれへの批判（ガーダマー、T. イーグルトン、ハーバーマス）の両方を見据え、単なる折衷や媒介まして混淆ではなく、少なくとも文学理解に関わる部分だけでも、多重的な現実を異なった角度から解明する概念装置として、逆方向に異なったままに両方を採り込み両方に依拠するという見方を持つべきではないだろうか。

＜架橋不可能＞なままでの両者の共存こそがむしろ当然なのであるという言い方を、例のPh.フォルジェは述べていたし、H.ミラーも上記（二）節で触れたように、「＜字義通り＞の読み」「存在論的な読み」「記号論的な読み」などの併存の必要性を説いていた。また、＜脱構築派＞の理論家 P.ド・マンも、リルケにおける詩作の或る「転回」、殊に『新詩集』でのそれの中に「意識の自己現前の必然的不在」を認め、主体と客体の交替（ヒアスムス）というフィ

ギュール の働きに着目している。彼はここで、そのヒアスムスという＜シニフィアン＞の優勢による詩法こそが、歌われる意味内容（欲望の満たされ難さ、愛の無力、無垢の者の死、世界の脆いありよう、意識の疎外、など）よりも重要になってくる、そういった詩のありかたを指摘する。このように述べながらも P.ド・マンは、リルケを理解するための「メシア的読解」と「脱神秘化的読解」との並列を提言するのである[41]。

筆者はかつて、ムジールの多層的な小説『特性のない男』を扱った小論で、主としてR.バルトの理論に依拠しながら＜意味の読み＞から＜テクストの読み＞へという読解の転換を考えたことがある[42]。概念の厳密な定義を欠くことになるが、今この＜テクストの読み＞は＜Schriftの読み＞と変更できるかもしれない。これを書いたのは１９８５年のことであった。＜意味の読み＞は収縮・内閉であり、＜テクストの読み＞は拡散・解放であると思えたからである。今このように論じてきて両者の併起を視野に入れるべきことの重要さを強く考える。

小論を冒頭にも掲げたノヴァーリスの言葉で結ぶことにしよう。

「物語や［‥‥］詩は、一切の意味や連関を持たず、全くの断片のようにまさにありとあらゆる物々からできていなくてはならない。」[43]

文学、とりわけメルヘンが「非連関的（unzusammenhängend）」であることを要請した。おそらくこれは、可及的彼方に見えて来るであろう＜意味＞や＜連関＞を目指して言われたことであろう。われわれは、「物語」「詩」「メルヘン」という語に替えて、＜テクスト＞あるいは＜Schrift＞という概念をこのように考えることができるであろう。

＜了＞　(1998-4-29)

＜註＞

1) Fr. シュレーゲルの引用文は、Schmitz-Emans: *Schrift und Abwesenheit*, München 1995, S.461。ノヴァーリスの引用文は、Novalis: Schriften 2, S.672

2) 拙稿：「＜書かれたもの—Schrift—の意味＞--R. ムジールとW. ベンヤミンにおける言語間の比較（その2）山口大学「独仏文学」第18号（1996）所載。

3) H.-G. Gadamer: Unterwegs zur Schrift? In: A.u.J. Assmann / Chr. Hardmeier(Hrsg.): *Schrift und Gedächtnis*. München 1983, S. 10

4) Ph. フォルジェ編：『テクストと解釈』（轡田・三島訳　産業図書）平成２年。

5) Th. Pekar: *Die Sprache der Liebe bei Robert Musil.* München 1989, S.171

6) R. Pietsch: *Fragment und Schrift---Selbstimplikative Strukturen bei Robert Musil.* Frankfurt a.M. 1988, S.2

7) J. デリダ：『根源の彼方へ--グラマトロジー』 上巻（足立訳　現代思潮社） 1984年 191ページ。ドイツ語訳では、J. Derrida: *Grammatologie.* Frankfurt a.M. 1974, S. 166

8) D. Heyd: *Musil-Lektüre: der Text, das Unbewußte.* Frankfurt a.M. 1980, S.136

9) H.-G. Pott: *Robert Musil.* München 1984, S. 131ff.

10) Ph. フォルジェ：「魂から叫ばれた（書かれた）？」　注の４）参照。

11) J. Hörisch: Das Sein der Zeichen und die Zeichen des Seins. In: ders. *Der andere Goethezeit.* München 1992, S. 163 f. u. 147 f.

12) J. H. ミラーの言及は、J. カラー：『ディコンストラクション』（富山/折島訳　岩波書店1985年　209ページ）によった。原文は1979年に出ている。

13) W. Benjamin: *Goethes Wahlverwandtschaften.* In: ders. Gesammelte Schriften. Frankfurt a. M. 1974 Bd.I.-1, S. 164 f.

14) W. Benjamin: *Gesammelte Schriften* Bd.I - VII, hrsg. von R. Tiedemann & H. Schweppenhäuser, Frankfurt a. M. 1981

15) J. カラー：上掲書、55ページ参照。P. ド・マンにはベンヤミンの『翻訳者の使命』を扱った論文がある。従って、アレゴリーに関して、ベンヤミンの思想を知らなかったということは勿論考えられない。

16) S. Weigel: *Entstellte Ähnlichkeit, W.Benjamins theoretische Schreibweise.* Frankfurt a. M. 1997

17) J. デリダ：「バベルの塔」『他者の言語』所収（高橋允昭 編訳　法政大学出版局）1989年。

18) A. Hirsch: *Der Dialog der Sprachen---Studien zum Sprach- und Übersetzungsdenken W. Benjamins und J. Derridas.* München 1995, S.241.

19) W. Menninghaus: *Unendliche Verdopplung.* Frankfurt a. M. 1987. なお、拙稿「《比喩》と《アレゴリー》--- R.ムジールと W.ベンヤミン」 山口大学教養部紀要　第２８巻　１９９２年　参照。

20) M. Brod: Nachwort zur ersten Ausgabe. In: Fr. Kafka <*Amerika*>. Fischer Bücherei 1956, S.233 f.

21) F. Kafka: *Tagebücher.* S.757

22) J. Wolfradt: *Der Roman bin ich --- Schreiben und Schrift in Kafkas <Der Verschollene>.* Würzburg 1996, S. 134 f.

23) D. Kremer: Die Identität der Schrift--- Flaubert und Kafka. In: DVjs Bd. 63 (1989) S.547 - S.573. hier S.

24) P.-A. Alt: Doppelte Schrift, Unterbrechung und Grenze--F. Kafkas Poetik des Unsagbaren im Kontext der Sprachskepsis um 1900. In: JbSg Bd. XXIX. (1985) S.456 - S.490. hier S. 469 ff.

25) U.C.Steiner:*Die Zeit der Schrift -- Die Krise der Schrift und die Vergänglichkeit der Gleichnisse bei Hofmannsthal und Rilke.* München 1996.

26) R. M. Rilke: *Die Aufzeichnungen des Malte Laurids Brigge.* Sämtl. Werke, (Insel Verlag, München 1966) 6.Bd., S.756.

27) M.Schmitz-Emans:*Schrift und Abwesenheit --- Historische Paradigmen zu einer Poetik der Entzifferung und des Schreibens.* München 1995.

28) プラトン: 『パイドロス』。ここでデリダが、プラトンのエクリチュール断罪を脱構築してみせたことがしばしば指摘される。(Ph. フォルジェ：上掲書、308ページ、など。)

29) M.Vollmer: *Das gerechte Spiel --- Sprache und Individualität bei Fr. Nietzsche und P. Handke.* Würzburg, 1995

30) P.Handke: *Die Wiederholung.* Frankfurt a.M. 1986, S.333.

31) M.Vollmer: *a.a.O.* S.272f. Optik とはもちろんニーチェの用語である。一番有名なのは、「学問を芸術家の Optik のもとに見るが、芸術は人生の Optik のもとに見る。」(F. Nietzsche: Versuch einer Selbstkritik. in: *KSA*, Bd.1, S.14)

32) E.Behler: Dekonstruktion und Hermeneutik. In: ders.: *Derrida - Nietzsche, Nietzsche - Derrida.* München, 1988

33) 例えば: 中岡成文「意味の主体とポジシオン」『理想』1988年 春 第638号 <特集＝解釈学とポスト構造主義> 所収。

34) Ph.フォルジュ: 「風変わりな論争のための手引き」 註 4) 参照。

35) A.Hirsch: *a.a.O.*, S.300.

36) M.Frank: *Was ist Neostrukturalismus?* Frankfurt a.M. 1983.

37) T.イーグルトン: 『文学とは何か --- 現代批評理論への招待』(大橋訳 岩波書店) 新版 1997年 (原著は、1985年、第二版 1996年)

38) J.Habermas: <Überbietung der temporalisierten Ursprungsphilosophie: Derridas Kritik am Phonozentrismus>. In: ders.: *Der philosophische*

Diskurs der Moderne. Frankfurt a.M., 1985

39) U.Tewes:*Schrift und Metaphysik --- Die Sprachphilosophie J.Derridas im Zusammenhang von Metaphysik und Metaphysikkritik.* Würzburg, 1995.

40) 中岡成文：『ハーバーマス』（講談社 1996年）216ページ。

41) P.de Man: Tropen (Rilke). In: ders.: *Allegorien des Lesens.* Frankfurt a.M. 1988, S.77 ff.（原著の <Allegories of Reading>は、1979年刊）

42) 拙稿:「R.ムジール『特性のない男』の読み方の転換 --- <意味の読み>から<テクストの読み>へ」西田越郎先生退官記念ドイツ文学・語学論集(1985年) 所載。

43) Novalis: Schriften 3. Stuttgart 1968, S.572